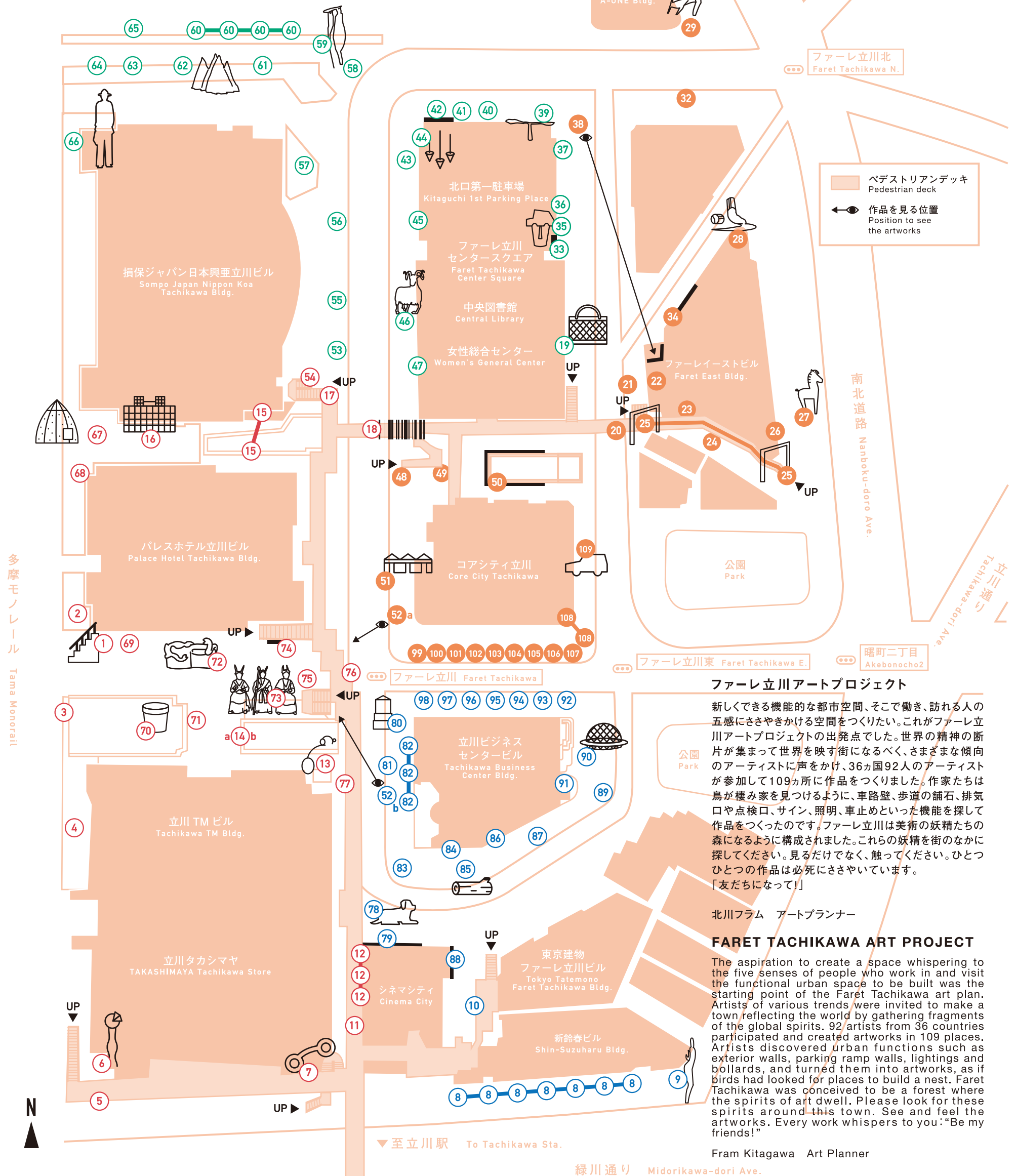
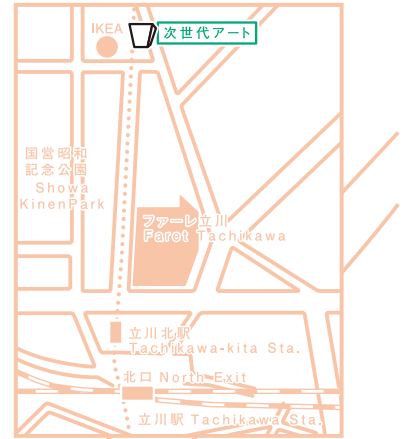


FARET TACHIKAWA ART MAP

ファーレ立川アートマップ



ファーレ立川アートプロジェクト

新しくできる機能的な都市空間、そこで働き、訪れる人の五感にささやきかける空間をつくりたい。これがファーレ立川アートプロジェクトの出発点でした。世界の精神の断片が集まって世界を映す街になるべく、さまざまな傾向のアーティストに声をかけ、36カ国92人のアーティストが参加して109カ所に作品をつくりました。作家たちは鳥が棲み家を見つけるように、車路壁、歩道の舗石、排気口や点検口、サイン、照明、車止めといった機能を探して作品をつくったのです。ファーレ立川は美術の妖精たちの森になるように構成されました。これらの妖精を街のなかに探してください。見るだけでなく、触ってください。ひとつひとつの作品は必死にささやいています。「友だちになって!」

北川フラム アートプランナー

FARET TACHIKAWA ART PROJECT

The aspiration to create a space whispering to the five senses of people who work in and visit the functional urban space to be built was the starting point of the Faret Tachikawa art plan. Artists of various trends were invited to make a town reflecting the world by gathering fragments of the global spirits. 92 artists from 36 countries participated and created artworks in 109 places. Artists discovered urban functions such as exterior walls, parking ramp walls, lightings and bollards, and turned them into artworks, as if birds had looked for places to build a nest. Faret Tachikawa was conceived to be a forest where the spirits of art dwell. Please look for these spirits around this town. See and feel the artworks. Every work whispers to you: "Be my friends!"

Fram Kitagawa Art Planner



20 □牛島達治 日本 1958-
Tatsuji Ushijima Japan 1958-
「古典的な交信機器、伝声管」
「Classical Communicating Instrument,
Speaking Tube」
オブジェ object

牛島達治は無用の機械をつくることに喜びを見いだしている作家です。ただ回り続け土を耕していく機械、石をひくだけの機械など。しかしそこにはいつも精神のふるえがあるのです。心のふるえのない技術は目的に向かってただ合理的な解決をもとめるのですが、そこに行かないことによって彼の作品は心のふるえをもち続けるのだといえます。「風の音は何色?」と伝声管はきいています。



21 □大岩オスカル幸男
ブラジル / 日本 1965-
Oscar Satio Oiwa
Brazil / Japan 1965-
舗装材 paving material

オスカルは日系2世のブラジル人で、建築家として日本に来ましたが、今は美術の仕事をしています。ですから彼の背景には都市が図面のようなものとして横たわっているようです。都市にユーモアのある風穴を開けようとする作品をつくるのが特徴です。ここでは太古の昔、立川にいたかもしれない三葉虫やゾウリムシのような大きな魚を舗道に浮かび上がらせてました。



22 □ナディム・カラム
レバノン 1957-
Nadim Karam Lebanon 1957-
機械搬入口
equipment loading entrance

ゾウ、キリン、山猫などのシルエットは古代の行列です。それは古代と現代が一緒にあったメルヘンで、影ですから彼の背景には都市が図面のような世界です。彼は日本で建築の勉強をしつつ作家活動をした人で、お水取りなど日本の空間と儀式に興味をもっています。アラブと日本には東洋的なつながりがあり、それがあつたつかしさを呼び起こすようです。



23 □トニー・バーラント
アメリカ 1941-
Tony Berlant USA 1941-
換気口、給油口 vent, oil tap

バーラントはこの場所で仕事をするを喜びました。少し暗く、給油口もあるドライエリアの壁は、普通そんなに喜ばれません。しかし、彼はここを洞窟のなかの聖なる泉のように感じたのです。ここで作家は金属の断片を貼り合わせて彼の内的な世界を描いています。彼はアメリカ先住民の美しい織物の蒐集と研究を行っていますが、そういう関心わかる気もします。



24 □ジミー・ダーハム アメリカ 1940-
Jimmie Durham USA 1940-
「ガラガラヘビ星と7つの方位」
「The Rattlesnake Star and the Seven Directions」
植栽内オブジェ object in shrubbery

ダーハムはアメリカの先住民チェロキーの出身です。立川に来た時、彼は基地跡の雰囲気が残っているこの場所を感慨深げに歩きました。青年の頃、兵役で日本に滞在したそうです。チェロキーには東、西、南、北、上、下、内面へ、という7つの方角があるそうです。彼は民族の記憶をこの都市のなかにひとつの出会いとして設置したのです。



25 □柳健司 日本 1961-
Kenji Yanagi Japan 1961-
笠木 gate

このゲート(笠木)は一番早い時期に建築物として建てられました。古い建物と新しい建物の間にある暗く狭いぐんまりのスペースは建築的処理ではなかなか難しく、ここはアーティストの出番です。ふたつの赤い門とそれをつなぐ赤い鉄、夕方以降ぱんやり光る紫色のネオンの壁は魅力的な空間をつくりだしました。



26 □PHスタジオ 日本 1984結成-
PH Studio Japan 1984-
「ウォーターマーク(水標)」
「Watermark」
連結送水管カバー fire hose box

PHスタジオは建築の魅力を美術という広い抽象的世界にとりこみ、また美術というパーソナルな声の部分を建築の世界にとりこもうとしているグループです。「社会に機能しているものが美術になれるか?」ということをテーマにしています。以前彼らは捨ててある椅子を解体し、つなぎあわせ色を塗って、もとの椅子よりずっと美しい椅子をつくったこともあるのです。



27 □ゲオルギー・チャプカノフ
ブルガリア 1934-
Georgi Tchapkanov
Bulgaria 1934-
道祖神
guardian deity figure

彼はいつもデッサンをしています。そのドローイングはスピードがあつていきいきしています。肖像彫刻も得意ですが、今回は立川の鉄屑屋さんをまわって、昔使われた農機具の残骸を集めてきました。耕耘機の羽根は羊の角どとか、材料を見ながらどういう動物をつくるか考えていくのでした。しかし機械はとがっていたりするので、街のなかに置くために安全にするのが一工夫でした。



28 □クレス・オルデンバーグ
スウェーデン / アメリカ 1929-
Claes Oldenburg Sweden / USA 1929-
「リップスティック」
「Lipstick with Stroke Attached (to M.M.)」
オブジェ object

金属板に色を塗っただけのリップスティック(口紅)。それは20世紀の都市文明の象徴のようなものです。オルデンバーグはよく知られた日用品をキャンパスや都市のなかに突然もちこみ、そのものとその背景を新鮮に見せてきた作家です。それにしてこのリップスティックはその鮮やかな赤い色をもって永遠の若々しさとみずみずしさを自己主張しているように見えるのです。



29 □エステル・アルバルダネ
スペイン 1947-2004
Esther Albardané
Spain 1947-2004
「タチカワの女たち」
「Tachikawa Women」
道祖神 guardian deity figure

エステルは窓の外を所在なげに見て、何かを待っている女性をよく描きます。その女性たちが頭に乗せているのは魚や月形のもので、それが何なのか聞いても教えてもらえませんでした。女性たちがいつも待っているだけなのが同じ女性である彼女には残念なのです。彫刻の形はシンプルですが、確かなデッサンに支えられた姿は美しい。犬は作家の大好きな動物です。



30 □パトリック・ヴィレール
ハイチ 1941-
Patrick Vilaire Haiti 1941-
「人間肘掛け椅子」
「Human Armchair」
植栽内オブジェ object in shrubbery

この人間肘掛け椅子は、権力のシンボルだという考えから生まれています。いわば人間が人間に君臨するための玉座なのです。彼は鉄を使って彫刻それ自身が神話や民間伝説のなかにある奥深い意味を表すことができると考えています。この椅子を見ていると椅子が椅子であるだけでなく、権力者であり、また神話的世界の王者であるかのように見えてくるのです。



31 □國安孝昌 日本 1957-
Takamasa Kuniyasu Japan 1957-
「Stack in Frame」
ゴミ集積所ゲート waste disposal site

國安孝昌は、レンガと木をつかった構築物をつくります。それはあたかも、古い廃墟の構造があらわになったふうに見えるのです。土と木という素朴な材質がもつ単純さと現代風の構築性が魅力になっているのですが、今回はゴミ集積所で永久に設置されるもので、鉄とブロンズの木とレンガでゲートをつくったのです。「目立たぬこと。主張しないこと。普通であること」がテーマです。



32 □関根伸夫 日本 1942-
Nobuo Sekine Japan 1942-
「対話のボラード」
「Dialogue Bollards」
車止め bollards

関根伸夫はアートを環境のなかに活かそうと仕事をしてきたパイオニアです。アートがギャラリーや美術館のなかに納まるものではなく、都市の空間のなかで息づくことの素晴らしいさをヨーロッパを歩いて感じたといいます。日本でも奈良、平安、鎌倉時代には彫刻が、桃山時代には障壁画が建築と結びついて盛んになりました。彼は美術の現代における可能性を探そうとしているのです。



34 □スティヴン・アントナコス
ギリシャ / アメリカ 1926-
Stephen Antonakos Greece / USA 1926-
「Tria-3」
壁面照明サイン illuminated sign

アントナコスはネオンという線と色をもつ素材を使って都市のなかに朝、昼、夕、夜と違った表情をつくります。2才の時にギリシャからアメリカに渡った彼のネオンの作品からはどこかカタコンベ(地下墓地)にかすかに光る灯のようなつましくもやわらかな表情が伝わってきます。彼のネオンは都会の夜に咲くやさしい花となりました。



38 □フェリーチェ・ヴァリーニ
スイス / フランス 1952-
Felice Varini Switzerland / France 1952-
「屋上の円」
「Top Circle」
ペントハウスサイン penthouse sign

ヴァリーニは複雑な空間を選んでそこに色を塗るので、ギザギザであったり直線であったり、切れていたります。しかし、それらの太さが違う切れた線は、ある1点から見るとひとつの真円になっている。その驚きをつくります。円に見えるのはただ1点だけでそれは見ることと空間の構造の不思議さを教えてくれるのです。この円は都市にある秘密の暗号ともいえるようです。



48 □牛波(ニューボ) 中国 1960-
Niu Bo China 1960-
「標的の裏側」
「The Reverse Side of a Target」
換気塔 ventilation tower

彼はこの時代、芸術表現はやり尽くしてしまったと考えます。ゼロからの出発のために、宇宙時代のアートとして、大空に飛行機の排気によって描かれる大空絵画や、無重力空間のなかで美術活動を行なう無重力絵画を始めました。ここでは20世紀美術の代表的なふたつの作品、ジャスパー・ジョーンズとルーチョ・フォンタナのパロディによって自分の立場を表明しているのです。



49 □ウスマン・ソウ セネガル 1935-
Ousmane Sow Senegal 1935-
「倒れた人」
「The Fallen」
植栽内オブジェ objects in shrubbery

最初にソウに会った時、彼が見ていた本に、アフリカの人達を描いたスケッチが載っていて、それを見る時の彼の眼は実に嬉しそうで、これは〇〇族だ、これは△△族だといって話をしてくれました。彼はヌバ族の写実的な彫像を、世界の都市と美術館に置いていきます。今回の材料はいわば日本の古い乾漆像のようなのですが、ソウに言わせると屋外でも大丈夫な彼の工夫によるものです。



50 □ジョセフ・コスース アメリカ 1945-
Joseph Kosuth USA 1945-
「呪文、ノエマのために(テキスト:石牟礼道子「椿の海の記」、ジェームズ・ジョイス「若い芸術家の肖像」)」
「Words of a Spell, for Nöema (Text from Michiko Ishimure : Story of the Sea Camellias and James Joyce: A Portrait of the Artist as a Young Man)」
車路壁 parking ramp wall

今までの芸術は視覚芸術でしかなかったという反省から、芸術の存在理由を問うという考え自体を芸術にする傾向が現れました。コスースは視覚的な束縛のなかにあった美術に、新しい広がりをもたらしました。石に彫られたふたつのテキストの交錯する対比は、見る者がどう考えるかで複雑な意味をもちはじめなのです。



52 □フェリーチェ・ヴァリーニ
スイス / フランス 1952-
Felice Varini
Switzerland / France 1952-
「背中あわせの円」
「Circles Back to Back」
ペデストリアンデッキサイン
pedestrian deck sign

No. 38を参照して下さい。



51 □依田久仁夫 日本 1949-
Kunio Yoda Japan 1949-
車止め(ベンチ)
bollard(bench)

依田久仁夫はできる限り少ない土を使って作品をつくらうとしています。ですから普段の作品は光を通すほど薄いものです。彼にとって土という材料は紙や木に近いやわらかなものになっています。今回のように街中の人が座るベンチという場所は彼のいつもの仕事とはあまりにも違いますが、ギリギリのかたちで彼の考えを活かして美しいベンチをつくりました。



99 □ロベルト・G・ヴィラヌエヴァ フィリピン 1947-1995
Roberto G. Villanueva The Philippines 1947-1995
「都市の神」
「Urban Deity」
道祖神(車止め) guardian deity figure (bollard)
毎年10月13日開帳
Open to the public on October 13 every year

ヴィラヌエヴァは都市の近代化によって失われた固有の文化をつかみ直すために地方に移り住み、そこで他者も参加する表現活動を行ってきました。彼の作品には古代からの習慣や儀式が入ってくるのです。立川では両性具有の都市の神をつくりましたが何度も壊されました。この神である作品は毎年10月13日にご開帳される以外は厨子にしまわれることになりました。



100 □陰里寿朗 日本 1960-
Juro Kagesato Japan 1960-
車止め bollard

陰里寿朗は人型の顔の部分が鏡になっている作品をつくりました。彼は日常的な感覚で接しながらもユーモアのある彫刻をつくります。この鏡は道ゆく人が立ち止まり自分を見る鏡なのです。都市はさまざまな人たちが生きている場です。彫刻作品は見るだけでなく、その人たちを見ているのです。日々急いで生きている人たちに、自分を見直させる装置なのです。



101 □松田重仁 日本 1959-
Shigehito Matsuda Japan 1959-
「浮遊する水」
「Water, Floating Around」
車止め bollard

松田重仁は木彫りの作家です。今回の仕事でも、まず木を彫ってそれを型抜きしブロンズの作品に仕上げました。ですから木彫りのノミのあとがそのまま感じられます。ここでは作家はひとつの美をつくりました。そこにはタイムカプセルとして未来に花咲く実をつくらうとの望みがあるのです。身近なものに対する愛着は美術の動機のひとつなのです。



102 □植村公雄 日本 1949-
Kimio Uemura Japan 1949-
車止め bollard

植村公雄はステンレスという輝きのある材料に色と形を組み合わせる異種混合の妙のある作品をつくります。これは要素を減らすという最近の美術には珍しく、足し算の世界です。その足し算は、雲や山や川といった幼い頃の記憶によってできてきます。幼い頃の記憶を要素とする態度は美術の動機のひとつです。



103 □リカ・ムータル オランダ 1939-
Lika Mutil The Netherlands 1939-
「地中から世界へ」
「From Earth to the World」
車止め bollard

ムータルはこの御影石の彫刻で、外観は分裂している、万物のなかにある統一という基本的原理を示そうとしました。ここでは上部は鍔の輪でつながれていて、その下はふたつの割られた石によってできています。その方法は、輪をつくったあと、石の下部を割るという難しい作業によるものでした。作家はこの舗道に、家庭や美術館のようなとどまるための場所を設定できなかったのです。



104 □小林泰彦 日本 1947-
Yasuhiko Kobayashi Japan 1947-
車止め bollard

小林泰彦は目が錯覚するような作品をつくりました。車路側がまっただけで歩道側が少し変わった近道でできている、地上との接点が1点という不安定な形態です。作家はなにか楽しい遊びをしてやろうと考えているようです。ステンレスの作品の場合ブロンズなどのように手でつかんでつくっていくわけではないので、頭腦のなかと図面の上での作業が多くなるかもしれません。



105 □藤原吉志子 日本 1942-2006
Yoshiko Fujiwara Japan 1942-2006
「ウサギとカメ」
「A Rabbit and a Turtle」
車止め bollard

藤原吉志子は金属を型に溶かしこんでつくる作家です。それを鋳造(ちゅうぞう)というのです。よく知られた動物や童話を、楽しい意表をつくり形をつくる童話作家といえるでしょう。彼女にとって、子どもがよび登り、大人が腰掛けておしやべりして、てっぺんがピカピカする、そんなほのぼのとして嬉しくなる彫刻がのどかな邪魔ものとして天下の公道にあることが望ましいのです。



106 □金沢健一 日本 1956-
Kenichi Kanazawa Japan 1956-
車止め bollard

金沢健一は鉄やステンレスの立方体の組み合わせによって、シンプルな作品をつくります。単純な方法で感動を与えることを目指す作家は多いのです。ステンレスは鉄とニッケルの合金ですが、この素材の登場は現代の空間を特徴づける輝きと軽さ、強さをもっています。現代の都市空間ではよく使われますが、それ故にそのシンプルな造形で独自の作品をつくるのに苦労するのです。



107 □黒鳥晴男 日本 1950-
Haruo Kurotori Japan 1950-
車止め bollard

黒鳥晴男はグラスファイバーを使ってシンプルな垂直の形をつくりますが、この単純な形をどれだけ美しいものとするかに作家の丹精と思想が問われています。作家は単にどこに置いてもよい立体をつくるのではなく、あくまで現実的な広がりをもつ空間がそこにあるという意識のなかでつくります。都市機能そのものとしての美術に作家は関心があるのです。



108 □レベッカ・ベルモア
カナダ 1960-
Rebecca Belmore Canada 1960-
車止め bollard

ベルモアは、カナダ先住民アニシナベの作家です。彼女の仕事にはカナダの自然とその素材を使って大地に話しかけたり、失われた民族の言葉を求めたりするものが多く、時間と土地の深い結びつきを人に知らせるのです。ここでは車止めと建物の2か所にアニシナベ語と日本語で「私は太陽を待つ」と書かれたプレートが置かれ、夏至の正午それらが太陽の光を反射して重なり合います。彼女はここで異なった世界のつながりを示そうとしたのです。



109 □ヴィト・アコンチ アメリカ 1940-
Vito Acconci USA 1940-
車止め(ベンチ)
bollard (bench)

アコンチは空間の意味をがらりと変えてしまう仕事をする作家ですが、昔はパフォーマンスをすることによって美術というものの見方や常識を変えてきました。やがてパフォーマンスの場の装置に関心が移り、ついに空間自体の変容へと向かったのです。今回は、舗道そのものが車になるという作品をつくりました。それは車社会に対する疑問にもなっているのです。